

- 相良 正次
 ④ 神戸市のマスタープランについて
 神戸市調査室長 山崎 博
 映 画：青い運河(活動する瀬戸内)、
 阪神都市圏、水
 参加者：200名
 (8) 第3回学生見学会(40.11.21)
 見学先：神戸高速鉄道神戸駅工事、阪
 神高速道路 神戸1号線工事、
 参加者：53名、参加費：無料
 (9) 高い盛土の沈下に関する研究会
 (40.11.26, 三和銀行玉造支店)
 主 催：土木学会関西支部
 後 援：土質工学会関西支部
 題目と講師
 ① 高い盛土の沈下に関する土質力学的考察
 京都大学教授 工博 赤井 浩一

- ② 道路からみた高い盛土の沈下について
 日本道路公団高速道路試験所調査役
 稲田 倍徳
 ③ 国鉄からみた高い盛土の沈下について
 国鉄大阪工務局長 工博 西亀 達夫
 参加者：87名
 (10) 鉄筋 コンクリート構造における
 ガス圧接講習会(40.10.22, 大阪府職員
 会館)
 主催：日本圧接協会
 後援：土木学会関西支部ほか 7学協会
 特別講演1題, 講義5題, 参加者254名
 (11) 最近の鋼構造に関する講習会
 (40.10.26~27, 大阪厚生会館)
 共 催：日本材料学会関西支部, 土木
 学会関西支部, ほか 6学協会
 講 義：10題, 参加者：310名

- (12) 第8回溶射技術講演 および研究
 発表会(40.11.4~6, 日刊工業新聞大阪
 支社)
 共 催：日本溶射協会ほか 3学協会
 協 賛：土木学会関西支部ほか 5学
 協会
 講 演：6題
 特別講演：1題
 研究発表：7題, 討論, 見学
 参加者：68名
 (13) 第7回幹事会(40.11.26, 土木
 学会関西支部会議室)
 出席者：玉井支部長, 松尾幹事長, ほか
 幹事 16名。

編 集
 後 記

戦争が終って満廿年余, われわれの生活も
 国の経済も一変した, と同時に日本の国土も
 ずいぶんその様相を変えた。国土開発の尖兵
 である土木技術者が, 国土の変ぼうに大きく寄与したこ
 とはいうまでもない。

一方, 国土の急速なる体質改善にともなって, われわれ
 の果たすべき役割り, ひいては土木技術の方向にも激
 しい変化が起こりつつあるように思われる。ひとつは,
 学問ならびに技術の発達にともなう, 専門の細分化であ
 る。土木学会も, 狭い意味の学問のワクに拘泥すれば, 自然
 に分化してゆくであろう。特に土木技術が本来持っている
 開放的性格の故に, この傾向は今後とも深まる可能性
 がある。しかし, 一方において土木技術は開放的であ
 るとともに総合技術である。したがって, その総合性に
 現代的意義を求めるとすれば, その方向での土木技術のあり
 方をこそ, われわれは追究すべきではあるまいか。それは
 分化を止めるという消極的立場ではなく, もっと積極
 的に新時代での土木技術の主体性を探ろうという意図
 にもとづいている。

新春に当たり, われわれが特集<開発は社会と自然を
 変える>を企画したのも, 将来の土木技術における総合
 性を求めるために, ひとつの参考資料を会員に提供しよ
 うと考えたからである。これはいわば問題提起に過ぎない。
 これを種にそれぞれの職場で, 会員の皆さんが一緒に
 考え, 討議して頂ければ, 編集者として幸これに過ぎ
 るものはない。さらにこのテーマに関連して, 多くのご
 意見なり, 体験なりをぜひ伺いたいと思う。

総合力とは元来, 個々の核の力よりはむしろ核内の結
 合に重点を置いて考える。全体として眺めた場合の調和
 に重点を置いて考える。つまり総合力を鍛え養うために
 は, 同族意識的なケチな団結心はかえって斯界の発展に

マイナスになる恐れがある。換言すれば, これからの土
 木界の発展のためには, 自らの殻を固め守るためのエネ
 ルギーを潰えるわけにはいかない。殻を打ち破った広い
 舞台でこそ, のびのびとした土木技術の新たな発展が
 期待できるであろう。

その新舞台においては, 開発と文化財, もしくは開発
 と自然保護は対立したのではなく包容された形で存在
 するに違いない。その方向へ向かってまず第一に土木技
 術者は, 今日の開発が持つ問題点の実態を核から飛び出
 た広場で知る必要がある。特集の個々の論文や報告
 は, このような意図により編集されている。

巻頭には, ご高齢ながら国際的に大活躍されている久
 保田名誉会員が建設界は勇を奮って海外へ進出せよと,
 若々しい論説を展開されている。昨年末には学会から「日
 本土木史——大正元年~昭和15年」が出版され, その
 イキサツも本号に説明されている。忙しく日々の工事や
 研究に追われているわれわれであるが, その成果は確実に
 国土に刻み込まれ, 歴史を形成してゆく。土木史を静
 かにふり返ってこそ, 土木界の未来への方向の必然性も
 探れるのではあるまいか。いや, そんな理窟ではなく,
 一人でも多くの会員が先輩たちの仕事をちょっと覗いて
 みたくなれば幸である。

本号から新講座「土木と気象」が始まった。奥田さん
 にはなるべくやさしくなるべく実用的に書いて頂けるも
 のと期待している。気象は土木の各分野と関係が深い
 ので関心の深い会員も多いことと思う。気象に関連して,
 会員よりご質問とか参考資料など頂ければ, 講座の内容
 も大いに具体的になり得ると思う。

なお, 本号には昨秋募集した懸賞論文の当選作が一編
 掲載されている。あわせてご愛読下さい。

(高橋 裕・記)